

# 近代青森県

## キリスト教史の研究(その三)

佐藤 和夫

### 第四章 青森県近代化におけるキリスト教

#### 受容意識

既述のように、青森県全体として見た場合のメロテスタント教会とギリシヤ正教会が、明治時代前半に果たした社会に対する指導的役割は特筆されなければならない。ただ、この二つの代表的宗派が社会的影響において他の諸派、つまりローマ・カトリック教会、聖公会、メソヂスト派、メロテスタント教会、ひいては神道、仏教にぬきんでたのは何故か。それらの点を究明することによって、青森県の近代化とは、一体何なのかも明らかにできるのである。

オーストリア(メソヂストとギリシヤ正教)が土族集団であつたことが大きな意味をもつていた。共に時代の変革の中に身をもつて投じた青年ばかりで、歴史の担い手たる自負があつた。源晟は、大同団結運動の演説中「メソジがれ」とのメジを、大きな鉄扇で受けとめ「だまれ！」とにらみ返す気概を豊富にもつていた。初期のキリ

スト教徒らが武士道的精神をもち、不屈の闘志に溢れていたことは、伝道の大きな推進力となつた。更に士族(旧武士)という階級意識は、自覚の有無にかかわらず、一つの社会集団としての連帯感を強め、維持するものであつた。このことは共同体における指導者又は指導上の改宗が決定的要因となり、共同体の改宗となつてゆく。「メソヂストの宣教師は、自然に存する集団の線にそつて教会に加入する集団的改宗を奨励した。少くともある事例では、村の全員が洗礼をうける準備ができたと考えられるまで洗礼は授けられなかつた。村の有力者たちが大いに利用された。村人はかれらの指示にしたがうならわしになつていたので、かれらはその集団に対して責任をもつていた」と、K、S、ラトトレットは、インドのキリスト教についてのべているが、隅谷三喜男氏は、日本のキリスト教は「家族集団」を基盤としており、その家族は部落の中では孤立しており、教会は地域共同体からはみ出した存在であり、個々の信徒によつて構成される信仰の共同体であつた、ととらえているが、士族の集

回入信の時期における同地域や、家族ぐるみの、特に戸荒衆教会などの例に見られるような、信徒の意識が個々人の明確に信仰による回心であつた結果の共同体かどうかは疑問である。又、信者の集団が地域社会からは又出したところか、かえつて指導性を示した場合も多かつたこととどう解釈すればよいか。だが、ともかくかれらが、政治活動のリーダーとしての面は別にして、民衆教化に大きな能力を示したことは士族ゆえの教養と精神力を有効に役立てたものと云つてよい。明治新政府は神仏分離を断行し、その結果神官は浮上し、僧侶は沈滞する項目となつた。神官は教部省下の教導職に任ぜられ、三ヶ条の教範の指導理念(一、敬神愛國の旨を体すべきこと、二、天理人道を明らかにすべきこと、三、皇上を奉戴し朝旨を遵守すべきこと)を基本準則として、各地に講習会が遍かれ、その教化活動を期待されたのであるが、更にその内容を具体化し、神直には直接縁の遠い公民教育的課題が加わり、政治的法律的色彩を強め、その効果をあげるため、教導職の任用範囲を神官のみでなく、僧侶、民間有志、地方によつては落語家、講談師、売卜者等役立ち得ると見られる職業人にまで拡大して所期の成果を挙げることにつとめた。<sup>4)</sup>しかし、青森県においては、(一)、神官が教化するだけの新時代の理念にふさわしい好字意欲、教養のあまり実力をもたなかつたこと、(二)、神官が民衆教化の使命感と責任感において不充分であつ

たこと、(三)、神官の経済的困窮により、民衆教化にまで手が及ばないこと、(四)、一般民衆の無知と生活難に神官の生かじりの教化は通用せぬこと、(五)、新政府の方針である神道偏重政策が真に民衆の納得するところにならなかつたこと、が主な理由として、前野喜代治氏によつて指摘されているように、ほとんど見るべき効果はなかつた。<sup>5)</sup>仏教の場合は廃仏棄蕪の激中におかれ、仏教諸宗派合同の大教院の設立などで結束と勢力回復をはかつたが、徳川時代の封建制下でその地位を利用され、安んずるもさばつた大部分の僧侶には、新時代に対する使命感は見られず神直よりも無力をかこつた。前野喜代治の指摘した五項の欠陥は、(三)の経済的困窮を理由とすることを除いて裏返しに見れば、キリスト教が地方教化に果たした役割であつたということが出来よう。

オニに、士族集団のもの神に対する理解度が、儒教による教育を共通基盤にしていたため受容が比較的容易であつたこと。フロテスタント、キリスト教移入当時、日本人には *God* という觀念はとらえにくかつた。もともと日本人の神の觀念は、唯一絶対者ではなく多種の神を創造し、一元的な神をもたず、神直は雨ごいや、虫おくり、豊作祈願、感謝后などの生産面を担当し、仏教は檀家制度に見る戸籍部門と医療、死後の幸福などの面を担当し、現世・来世についての幸福を民衆は神仏に祈願している。<sup>6)</sup>しかし、現世利益の信仰は今近な救済ではあつて

も、人間のもの根本的な悩みを解消するには充分ではない。そのような中で、キリスト教の神は一元的で、本多獨一がはじめて漢訳聖書にふれた時、創世記第一章一節「はじめに神は天地とを創造された」ということばに接したことは大きな衝撃となったように、日本人にとっては新鮮な印象を与えられた。全てのものは神にはじまり、神によって創造された后などとはいいたく如何なることなのか、朱子学をすら充分きわめていたとは云えない青丘本多にとっては、陽明学に苦心をひかれていたとは云え、大きな課題であった。源氏も明治六、七年頃盛岡にて聖書を手に入れている。さいわい、彼等は、儒教で云う上帝、天帝、皇天、長帝、真神等の絶対者の觀念として理解され、更にそこから平等の觀念とか罪の意識とかの、キリスト教の教義内容への理解を進めることができたのであった。

才三に、士族集團は社会の激動をもつとも垂く受けたゆえに、抵抗の姿勢を有したことである。キリスト教は戦争的宗教である。プロテスタントする姿勢がこの宗教の価値である。世俗に対する批判的態度は、クリスチヤンをして多分に社会倫理として受容された。そして、それは神の下での平等という点から、政治的には有司専制に對する自由民権運動となつてあらわれ、民権運動におけるクリスチヤンの果たした役割は重要であつた。全面的に見れば岩手県鈴木倉足、自由党解党後に受洗した片岡

健吉がそうであつたし、本多、菊池、源ら民権運動の指導者として活躍したことは既にのべた通りである。たゞ自由民権運動が後退するに従つて、政治改革を断念し、抵抗の一步後退したかたちとして、社会風俗の改良、婦人の地位の向上というよう后、秩序内部での改良という面が表面に押し出されてくる。しかし、秩序に対する非妥協を固守した一國の人産もまだ存在した。それは内村鑑三であり、植村正久、大西祝であつた。

次にキリスト教が、士族、平民の出身を問わず、神道、仏教にぬきんじて社会の理解を得るようになったのは何故か、その理由を考えてみよう。それは、士族にかぎらずキリスト教徒の受容意識が、多分に社会倫理的なものであつたこと。当然かれらの生活態度は倫理的にきびしいもので、本多は

「あるものは棲上に酒杯を浮べ、棲下に淫歌の声を逞しうし、生独り孤燈に對して情を生じ、万感煩りに襲來、唯世人のために樂を転じて禍とせんことを嘆けり、思を焦し心を暗し終夜眠をなさず」

と元旦の日記に記している。明治十八年一月にバプテストバ戸教会は、相談会において原十目吉、小野寺清三を不品行のかどで、石井富弥を教会不出席の故をもつて除名している。原十目吉は翌年悔い改めて信徒復籍を許されているが、彼は後年明治二十七年、愛媛縣に改進黨（公民会＝政友会）に属し、自由党の壯士に斬られ重傷を

買つたり、更に後年滿洲馬賊の首領になつてゐる。石井  
富孝も政友会の壯士で、選挙には土曜会、憲政本党と対  
立し、襲撃をうけたりしてゐる豪傑である。このような  
壯士達が教會員であつたとしても異とすべきことではな  
いが、当時のキリスト教久信の一つの形態があらわれて  
いるように。メソジスト藤崎教会の長谷川誠三は酒造家  
であつたが、クリスチヤンとなるや酒造家をやめ禁酒会  
を結成、その頃には珍しい「禁酒」の文字を刻んだバッ  
ジを會員につけさせた。クリスチヤンと禁酒は今でも守  
られてゐるが、カトリックとちがいプロテスタント系は  
特に飲酒を惡の根源とした。明治三十一年二月に行われ  
た日本鐵道ストライキは、東京、青森間の鐵道全線をス  
トックさせた。近代史的の黎明といわれた運轉の勞  
働者の勝利であつたが、その中核となつて指導したのは、  
尻内駅勤務の機關方石田六次郎、青森駅勤務の池田源八  
らのクリスチヤンで、不穩分子十名中五名は青森、尻内  
勤務で、十名中五名はクリスチヤンであつた。ストライ  
キ後「日鐵矯正会」が生れ、正式に勞働組合として発足  
し、規約には幹部のキリスト教的な思想がおりこまれ、  
高い人格的倫理性を要求された。石田らは禁酒会を結成  
し、片山潜は「今や矯正會員にして禁酒主義と基督教主  
義をとれる者頗る多しときく」とのべてゐるように、人  
格者集團とも云える倫理意識にみちてゐた。なお、片山  
潜の母にまへ原たまへはバプテスト派のクリスチヤンと

して、片山を助けた八戸の女性である。又前述の原十  
吉はたまの兄である。

次にキリスト教受容における救派 (Denominational)  
意識の問題だが、宗派 (sects) 意識について考へてみ  
よう。神道、仏教、キリスト教それぞれその教義的立場は  
異なるが、受容の意識にしても、布教の拡大にしても、  
明治初期はそれぞれの宗教がもつ教義の故にその差があ  
るとは考えられない。既述したように、それは正統的狀  
況の中における使命感と、現状に対する抵抗と拒絶の姿  
勢の差である。キリスト教における神の一元性の認識は  
青年達の久信の動機とはなつたが、必ずしも決定的なも  
のではなかつた。それは儒教における天、上帝の觀念に  
よつて理解されてゐたからである。福沢諭吉は「文明の  
概略」において「耶穌と神儒」と其説く所は同じからず  
と雖も、其善を善とし、惡を惡とするの大趣意に至ては  
互に大に異なることなし」と述べてゐるが、善惡意識は儒  
教における思想からの影響にほかならず、ましてキリス  
ト教に云ふ惡の本質に対する理解など望むべくもなかつ  
た。正義人直、信念とか云ふ儒教的用語における悲壯感  
めいたニュアンスは、キリスト教が世界に充分理解され  
てゐない伝道初期にあつては、イエス、キリストの生涯  
に通に通するものがあり、士族青年に訴へるものがあつ  
た。李多庸一の後継者とも云うべき働きを地元弘前を中  
心として行つた山元次郎は、弘前教会六十年を回顧し

「今日私の思うことは、山鹿素行が『聖教要録』を出版したとて、正義人直に論ずる覚悟であつた。聖教要録が幕府に容れられず、永徳に配流を命ぜられた時に、北条安房守に送つた一書に『それ故を罪するは、周公孔子の直を罪するなり。我を罪すべくも直を罪すべからず。聖人の直を罪するは時世の誤りなり』とある。私のことき素行に及びものかないことであるが、直のため信念のため、素志を貫ぎ、多少の迫害をしのび、あるいは不孝と呼ばれ、不忠と呼ばれるも、真理は最後の勝利と確信せざるを得なかつた。」

と述べているのは、まさにそのような悲壯感を云い得ていよう。そのような感覚的共感が当時の意識の底流にある。その結果、新渡戸稲造の「武士道」に神道、仏教、儒教を結したものが日本人の倫理観念を形成し、という。むしろ、対外的に純粋な日本精神を認識させるといふ業績を生み出し、更には別の意味における津田真道の「キリスト教国教論」にうながり、やがてはナショナルリズムと結合するという必然性を、キリスト教徒自身の中に包含していたのではなからうか。別の云い方をすれば、そのような日本及日本人の精神的風土に共通する何かを有し、融合し得る要素をもたないかぎり、キリスト教の定着は不可能であつたのである。プロテスタントのプロテストは、まずキリスト教自身に対してであつた。入信者

の内村鑑三、奥野昌綱、平岩宣保、松林介石らに見られるようにキリスト教に対する偏見は、当時としては一般的傾向であつた。本多康一は「紅毛碧眼何がある、今一時は雌伏して彼等の教を受くれ、後には之を凌駕せよ」と思つていた」という位であるから凡その想像はつこう。しかし、宣教師の使命感は、かれらのこのような根の浅い偏見を簡単に打砕いてしまつた。

「ただひたすら純粹に、自己の体験したキリストによるたましいの救いのめぐみを伝えて、これに与らしめねばならぬ」といふ、救い主イエスの使信を自覺してあらゆる犠牲と困苦とを忍び、すべてを献げて宣教の事業に一身を投ずる聖なる事業」

に從事する宣教師にとつて、苦闘であればあるほど大きな使命感にみだされていった。その場合に共通するものは、ただひたすらな「祈り」であつた。本多が動かされたのは、彼の終生の師丁、H、バラの祈りであつた。

「心を熱くして主に専へ祈禱を恒にせよとは同教師不断的教訓であつた。毎年初週の祈禱会を日本に初めたのも同氏の努力によると思ふ。同氏の説教には感服せんでもその熱誠な祈禱に感激して遂に信仰に導かれた人は決して少数では無いと思ふ」

とバラの教文を受けた井澤提之助は述懐しているが、このような人格的接触を通じての信仰の形成は、明治初期の布教を理解する上に重要である。熊本バンドのジエーン

ス、札幌バンドのクラーク、横浜バンドのバラ・ヘボン、  
R・F・ラウン、ギリシヤ正教のニコライ、メソジス  
ト派のジョン・インズ、カトリックのフォーリー等代表  
的且つ身近な人物の例であろう。このような人格的接触  
において、青年達は次の感情過程をたどる。ジョン、F  
・ハウス教授の言葉を引用して云う。

「自国について近代化の緊急さを必要とすることを認  
める人は、自国民をより近代化された諸国民よりも本  
性において劣っており、あるいは劣った状態にあると  
感ずる。また個人としても、かれは個々の外人よりも  
無価値で能力がないと感ずる傾向をもち。しかし、近  
代化が進行し、個々人が異国人についてものと知るよ  
うになるにつれて、かれは次第に自己をもっとましな  
人間と見なおし、この自己卑下から脱け出すようにな  
る。」

その結果、個人としては外国人と対等であるという意識  
をもち自己確信をかめた。

「近代化はこのような個人的自己確信の達成」  
ではないのかという。ジョン、F・ハウス教授の仮説は  
明確すべきであろう。

しかし、青森県のキリスト教界にかぎらず、一般的に  
直接外国人や宣教師と接触しない地域や階層において、  
彼らの個人的自己確信を達成したものは何か。ギリシヤ  
正教では日本人伝道者が外国人宣教師に代るものとして

その役割を果たしている。又一般的に教派により外国人宣  
教師と直接々触の機会があつたとしても、日本人青年の  
エリート意識に見える近代化の緊急性をどの点まで自覚  
していたか、又教義についての自覚がなされた上での回  
心 (Conversion) であつたのか疑問である。新渡戸仙舟  
翁は述懐して次のようにのべている。

上田十郎さんの父、農夫は盛岡にはじめてフランス語  
の塾をぬきました。ここには月給八十円のレストラン人  
の講師がおりました。いまの東北女学校へ白百合学園  
高校へカトリックの前身となつたのがこの塾です。  
明治初年のこの地方のキリスト教の基礎はここに建て  
られました。そのころの青年の進歩的な者にはあら  
そつてクリスチヤンになつたもので、加賀野の教会と  
四ツ家の教会とどつちがいいか論争したものです。(中  
略)……私も加賀野の教会の信者になつたことがあ  
るのです。流行みたいなのでクリスチヤンになつた  
ところでキリスト教の深い思想に影響されたわけでは  
ありません。(「随談」)。

既述のように八戸光栄教会設立のメンバーは大部分の  
士族を含み、二十才前後の青年が大多數で、家族の同時  
入信、その中には十才前後の少年少女数名をまゝえている  
のは、新渡戸翁の述懐と共通する現象であろう。バプテ  
スト八戸教会の除名された原十吉や石井富弥が、馬賊  
や政争の世界に生きがいを求めた壯士で、結局は信仰を

全うするに至らなかつたことは、一体最初から教義に對する直意識をもつていたのだから、と疑うに充分である。士族を中心とする集團入信、反政府運動（自由民権）等の姿勢の中に、宗派（*sects*）は歴史的必然性を伴つて將來したものであるけれども、入信においては多分に偶然性の問題であつたと考えるのである。南部地方に布教されたギリシヤ正教受容意識のうちにプロテストアンティズムを見るのはその故である。そのような信仰は、多分に社会的、地域的な影響によるものであるから容易に伝統の中に埋没しやすい。新渡戸仙童翁のように信仰の「卒業」となり、信仰告白自体に人格的決断としての欠陥は信仰喪失の間に何も残らないといふこととなる。八戸光栄教会は日露戦争を境に解消した「まぼろしの教会」に反つたが、その原因は以上のような点に求められよう。それを裏付けるのは、中野徳次郎のバプテスト派（プロテストメント）への転向である。彼は八戸光栄教会員の中でも設立以来の重要メンバーの一人であり、ギリシヤ正教会伝導師になりた平民である。彼はギリシヤ正教の教義について疑義をもち、直接接ニコライに質問するの巨が満足する説明を得られず、バプテスト派の宣教師ポートに偶然出会つた折、ポートからバプテストマ（*Baptist*）洗礼・浸礼しずめへの解釈をきき納得し、バプテスト派に転向し以来伝導師として活躍した。このような例は、ギリシヤ正教とバプテスト派のいりくんだ

南部盛岡、仙台地方にも見られる。当時、教義について信仰の本質から入信しようとすれば当然のきあらべき疑問であつた。彼が政治的にあるいは社会的に全く無名の下層民でありただけに、その信仰生活は多くの示唆すべき問題を含む。別稿で詳細を記したい。

當時において教派（*Denomination*）はどのような自覚をもつて受けとめられたであらうか。云いかえれば、それはキリスト教の土着化がいかなる教義理解の上で与されたか、の問題である。この設問に対する答は、本多庸一の場合、又は弘前教会の場合に典型的なものと示されている。弘前公会の設立後面も長く明治九年十二月、会員の衆議の結果メソジスト派に転ずることになり、その旨を横浜公会に書き送っているが、この自筆書簡は現在弘前教会に所蔵されており、衆議の様子を具体的に伝えている。それによると本多は、「小弟子ハ兼日申上候直而面ニ漂々たるの体なりしが、現今ニ至リ初メテ確定衆議ニ同じて厄求奮発、皆も主名を充充せんと欲す」と特に積極的でないような態度に見えるが、実際はその動機は、横浜からフランソワ・バラ外一名の宣教師が弘前を訪向したとき、本多は一致教会の本部（横浜公会）より弘前に伝導者を送つて教会を維持することは可能かと向うたのに対し、かれらは距離遠隔のため、これを聞いたインクは、それならばメソジストでこれに當らうかと考え、メソジストの長所、短所を本多に説いたことに

よる。「本多庸一伝」の筆者岡田哲蔵は、メソジスト転  
 会はインクの人物に傾倒した結果でありて、而派の信条  
 の比較によるものではない、と述べているが、<sup>(3)</sup>本多と直  
 持の關係にあつただけに肯定できる。私は旧稿において、  
 なお検討の余地があろうと保留したが、その際、公会主  
 義の姿勢がくすれてきたこと、私情を越えた本多の僻處  
 の地におけるインクとの協力が、バラに対する恩愛にも  
 まさつていたこと、などの諸事情が本多を現実的方向に  
 走らせたこと述べた。<sup>(4)</sup>事実、本多のバラに対する陣弁の書  
 簡にもそのことはうかがわれる。<sup>(5)</sup>メソジスト転会の象徴  
 にはかたがたしるしもあるが、教派変更は単純に考えられな  
 いが、本質的には、ハウス教授の指摘するように「かれ  
 の教派 (Denomination) の変更は、日本のプロテスタ  
 ント達が宗派 (Sect) に対して割合呑気な態度をもつ  
 ていたことの反映である」ということに帰する。その点、  
 外国人宣教師が教派的差別についてきびしい態度をとつ  
 ていたのと対照的である。<sup>(6)</sup>それは外国の諸宗派又は諸教  
 派の成立が、それぞれの歴史的試練を経ながら、それぞ  
 れの必然性をもつて由来し、それなりの靈的体験の中で  
 身についたものであつたのに対し、日本人にはそのよう  
 な意識は觀念的にとらえられても、大体において宗派、  
 教派の問題は一元的にしか理解できなかった。それ故に  
 教派間のきびしい差別も対立もなく、社会的、知的接触

をかれり同志の間で維持することができた。

このような態度が良いか悪いかはその判定の規準は何  
 もないが、たゞ歴史的結果において、初期プロテスタ  
 ントとして弘前バンドや、八戸光榮教会を生み出し、直接  
 間接に何らかの形にて政治、経済、文化、教育、思想、  
 出版等に大きな働きをなしたエネルギーは、多くの力を  
 結集した教派にとらわれない抱擁性にあると考えるので  
 ある。

## 註

①「北里羽の現勢」(デーリー東北社刊、昭和四十年  
 一十九頁)。

②「ラトリレット」キリスト教発展史」(隅谷三喜男、  
 現代日本とキリスト教四十一頁参照)。

③隅谷三喜男「同右前掲書」十六頁。

④「前野喜代治「青森県教育史」続(青森県文化財保護  
 協会、昭和三十六年)十・四十二―四十八頁。

⑤同右

⑥鹿野正直「明治の思想」才六章参照。

⑦前述「才二章、津軽地方の伝道形態」参照。

⑧中里進「源氏評伝」(世代十四号)。

⑨鹿野正直前掲書。

⑩弘前市町田新吉氏蔵。現在は弘前市立図書館に寄託  
 されたということである。この伝道日誌は、明治十



年十二月十五日より翌十一年一月二十二日までのものである。拙稿「本多庸一に見る明治初期プロテスタンティズム」(本誌五十号)参照。

(11)「徳又のあと」(八戸バプテスト教会、教会創立八年記念略史、昭和三十一年、乳版)。

(12)「八戸の歴史」下1、一二四頁、原十目吉は、明治十五年十二月十八日、バプテスト派遣教師ボートより栗田狩造らと共に、政営の湊川の氷を割って洗礼をうけ、八戸浸礼教会を設立した中心人物であった(高橋権雄編「日本バプテスト史略」上八十三頁、大正十二年)。

(13)「八戸の歴史」下1一二四頁、「八戸警察沿革史」五十八頁。

(14)長谷川誠三は石油、銀行その他実業界に活躍、大正十一年藤崎町の税金の半分は長谷川家のものと云われた(「青森県人名辞典」東興日報社)。

(15)藤崎町佐藤篤二氏所蔵。放射線状の刻みのついた直径一、五センチ程度のもので止め針のついた珍しいものである。座敷訪問した際拝見させていただいた。

### 禁酒

(16)「青森県勸業運動史」カー卷百二十三頁以下(日鉄ストライキ)の項参照。弘前大学相沢文蔵教授担当執筆。

(17)片山潜「日本の労働運動」(岩波文庫)九七頁。  
(18)原たまにのいては前掲「青森県勸業運動史」百四十八頁以下に詳しいが、「北方春秋」十三号所載「人面の記録」片山潜夫人の人とその生涯(昭和十五年)は、彼女の詳細な資料をもとに丹念に伝記的に紹介した唯一のものである。

(19)岩波文庫百十八九頁。

(20)陸奥新報々ここに人ありきー山鹿元次郎一、昭和四十四年三月十五日。

(21)「日本には日本の神がある。耶穌教は如何なるものが研究して、その上乗かつたら大いに攻撃しよう」(益本重雄・藤沢吉吉共著「内村鑑三伝」二十二頁)。

(22)比屋根安定「日本近世キリスト教人物史」二百七頁。  
(23)卜部幾太郎編「めぐみのあと」所収「平岩宣保」五十年を振り返りて百三十九頁。

(24)信仰の生涯ー回顧二十年所収、同「信仰五十年」。

(25)岡田哲三「本多庸一伝」四十三頁。

(26)石塚謙「日本キリスト教史論」東洋におけるプロテスタント、キリスト教一六七頁。

(27)「福音新報」大正十一年十二月(植村正久とその時代)カー卷三百五十頁。

(28)ジョン・F・ハウズ「日本人キリスト者とアメリカ人宣教師」(M・B・ジャマンセン編「日本における

近代化の向題戸所收、二百三十四頁、昭和四十三年、岩永書店。

(39) 岡田哲蔵、二百三十五頁。

(40) 石上玄一郎著「太平洋の橋―新渡戸和盛伝―」六十  
七頁、昭和四十三年、岩永書店。

(41) 岡田哲蔵「現代日本とキリスト教」二十九頁。

(42) 中野は自伝の中で「ニコライ伝道学校長を学中、ニコ  
ライ主教ハ東教聖鑑ノ講義中洗礼ヲ説明シテ、原語  
ノバプテスマハ、水ニ沈没スルトイフコトデアルト  
云ヒマシタ。其時中野ハ沈没トイフ意味ヲ何ゼ洗礼  
ト云ヒマスト向ヒマスト、主教云フ、女耶ノ學者ハ  
洗礼ト云ヒマシタト、中野ハ此答ニ不滿意アリマシ  
タカラ、今ポート(バプテスマ派宣教師)氏ノ、バ  
プテスマヲ浸メト云フ、感心シマシタ。バプテスマ  
ト晩サン式ハキリスト教ノ大礼デアレバ、儀式モ精  
神モ正當ニ実行スヘキモノト思ヒ(ハマス)と述ベ  
ている。

バプテスマ(Baptism)は一般的に洗礼と訳さ  
れているが、浸めの意味が本来の意である。人間の  
罪は本来健康な人間に附着した汚れ、傷のようなも  
のではないから洗滌によつて清め健康と純潔を恢復  
できるようなものではない。ローマ、カトリックの  
立場は恢復観である。バプテスマ派の考え方は、聖  
霊の告知する人間は全き罪人であるから、洗滌やい

やしによつて恢復できるような軽い附加的なものでは  
なく、人間の全存在が罪であるかぎり、全存在を  
抹殺して、新に甦えさせる以外に救いが無い、とし、  
水中へ全く沈められて新しく生れてくることバプテ  
スマの意義である、と説明している。

(43) 明治九年十二月付、横浜基督教教会長老奥村昌綱・吉  
田信好宛書簡。弘前教会名誉牧師藤田恒男師、牧師  
大木美三師の御好意により拝見できた。記して感謝  
する。

(44) 岡田哲蔵「本多庸一伝」五十六、七頁。

(45) 註(6)拙稿。

(46) 明治十年一月付バラ宛書簡。

(47) 註(8)前掲書二百四十五頁。

(48) 中野純次郎は最初教派について左のように考えてい  
る。

「日本へ渡来ノ宗派ヲ見ルニ幾派カ々モアリテ、互  
ニ是非ヲ主張スレトモ、我々日本ニハ聖書ト正史ヲ  
實驗シテ真理ヲ得ル外アリマセン。一教会ヤ一派ノ  
主張ノミタ向テハ、決シテ真理ヲ得ルコトハ難イト  
思ヒマス」

#### 才五章 将来への研究展望

紙数もたいぶ重くなったので、とりあえず筆者の一まず  
の整理をしたという意味でこの稿を終るが、次の課題

として明治後半から大正昭和にかけての展開を考えねばならない。社会は天皇制、資本主義国家の展開、發達と共に、農村教会、地方教会から都市中心の教会へ、信者層も市民社会の形成に伴って都市インテリを中心とした市民層へ、教会の担うべき役割もかつての民権運動への参加というような政治の動きに直向から立ち向かう姿勢から、地味な社会事業へというように変化を示してゆく。このことは、各教会の信者の動きの中でとらえることができると思う。又、この現象は、教会が社会の才一線に立ち、地の塩、世の光としての批判・抵抗・拒絶の精神から後退として、今日教勢は微々たるにもかかわらず、伝統と保身の中に埋没し、保守的な孤城に立てこもって、益々その本質を失ってゆきつつあることとつながってくる問題でもある。

本稿では教派意識の問題をもつと史料を博搜してから深く掘り下ろすように思いつつも新発見の史料が充分得られぬまゝ、叙述してきたが、その後得た史料も未整理であるので、近いうちにこの問題について稿を草したいと思っている。カトリック、聖公会、バプテスト、ホーリネス等の教派についても時代的にずれるので着察するに至らなかつたが、特にバプテスト派は士族中心から平民中心へと、その担い手が移行してゆく上での問題を考える好例と想うので、別稿にとりあげようと予定している。文字通り冗長無難な内容であるが、研究ノートのつも

りで読んでいただき、更にいろいろな点につき読者の御叱正、御助言、また新史(資)料の紹介等賜れば幸いである。

附記 成稿までに多くの方々に御世話になった。特に中里進氏・稲葉克夫氏・藤田恒男氏・佐藤篤三氏・八戸市立図書館・八戸聖ルカ教会・カトリック八戸塩町教会・日本基督教団八戸柏崎教会・八戸バプテスト教会・日本基督教団弘前教会・カトリック弘前教会等史料(資料)調査・紹介・提供・御教示の上で大変御好意にあずかった。又本稿作成の機会を与えられ督促された宮崎道生博士・荒井清明先生の各位に記して感謝の意を表したい。

(昭和四十五年一月二十四日 成稿)